
声ガ聞コエル 壱

shifour

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

声ガ聞コエル 壱

【Nコード】

N2010A

【作者名】

shifour

【あらすじ】

記憶とココロを何処かに忘れ、感情さえも失くしてしまったオレはマスターの護衛をするには最適な人間だった。何も覚えていない。誰も知らない。ただ、ココロが何かを、誰かを求めている。

夜・月・銃声（前書き）

少々刺激がある部分があります。ご了承ください承の上でお読みください。

夜・月・銃声

人は生きる為に誰かに依存するのだろうか。それとも、愛されたいが為に依存するのだろうか。しかし、その答えがどちらにしても、相手がいなければ意味がない。誰も知らない。この気持ちの名前も知らない。分からない。

「どうしますか？こいつ。」

夜。満月。月明かりに銃口が鋭く光る。その先で一人の男が命乞いをしている。腰を抜かし地べたに座りこみ、目にはうっすらと涙を浮かべている。

「た・・・助けてくれ！悪気は無かったんだ！」

今はもう使われていないコンビナートに、その声は清しいほどに響き渡った。

「なら。なんで俺の財布掏ろうとしたんや。あ？悪気が無い奴はこんなことしないよなあ・・・」

マスターはにっこりと笑っていた。男の前にしゃがみこみ同じ視線で話している。まるで。子供に話しかけるように・・・。

「あんたの財布が落ちそうになってたから入れようとしたんだよ！」

男は必死に弁解をしていた。多分、オレの向けている銃口が怖いんだろう。

「嘘を吐くためにならへんで？まだ兄ちゃんだって死にたないやろ？」

男は大きく首を縦に振った。

「しゃあないなあ・・・、ほんまのこと言わんと、兄ちゃんの頭の中に弾あぶち込む事になるんやけど・・・。どないしようかなあ・・・？」

マスターは足が疲れたのか屈伸をするように立ち上がった。

「……………わ、悪かったよ。本当はあんたの財布掏ろうと思っ
たんだ。そしたらいきなり振り返ったもんだから怖くなって…
あんな嘘吐いたんだ。本当に悪かったよ！だから、この通り許して
くれ！」

男はそう言い、両手を生ぬるいコンクリートの地面について土下座
をした。

「さやか。よー本当のことゆーてくれたなあ……………」

マスターはもう一度座り、地面に着けられている男の頭を撫でた。
子供相手だ。

そしてマスターは立ちあがり男の横を通り過ぎて行く。

「え？……………じゃ、じゃあ俺はこれで……………」

そういうと男はそそくさと立ちあがり、その場を後にしようとした。

「マスター。」

「え？」

男の足が五歩進んだ所でぴたりと止まった。

オレは再度マスターの指示を仰ぐ。そう。オレはマスターの指示を
聞き、その指示を忠実にこなす。それだけ。例えそれがどんな事
でも。

「うん……………」

マスターは悩んだように頭を掻いたが、実際答えは決まっている。
すぐにひとつの言葉が導き出される。

「……………殺せ。」

「イエス、マスター。」

すでに日常茶飯事になってしまったこの会話。

オレはゆっくりと引き金を引く。男の叫び声と銃声がコンビナート
に響き渡る。

しかし、オレの耳にその声は響いてこなかった。男の体に空いた穴
から止めど無く流れ出す、鮮やかな血の紅とオートマチックの硝煙
と火薬の匂い、薬莖が地面に落ちる時の金属音はうまくオレに届い
た。きつと、それらはオレと同じ成分で出来ているんだろう。陽の

光より月明かりをよく知っていて、暗い所から来たモノたち。
夜。満月。蒼い海と紅い海には月が綺麗に光っていた。

生きる為、人は誰かに依存するのだろうか。それとも、愛されたい
が為に依存するのだろうか……。しかし、その答えがどちらにし
ても、相手がいないんじゃない意味さえない。人がどんなにいても、皆
見えてみぬ振りをしている。誰も知らなかった。前の気持ちも今のこ
の気持ちの名前も知らない。分からない。

4 ダース・瞳・紅蓉

もし、昼と夜の間に名前を付けられるとするなら、夕暮れや夕焼けなんかじゃなく、安堵が焦か少し迷った。心情はまるで振り子のよう。しかし、その紅は揺らぎもせず紅蓮のように鮮やかに咲いていた。

いつもの昼。オレの仕事は夜から。だから昼間はいつも暇だ。

昼の世界はいつも賑やかで騒々しい。一步外に出れば、道路には必ずと言って良いほど人がいる。鳥の囀りも時折聞こえる子供の笑い声も奇声も、車が排気ガスを吐き出す音も都心の人ごみのざわめきも、オレにしてみればただ煩いだけだ。陽射しでさえもただ眩しいだけだ。

それでも外に出掛けなければいけない時がある。そんなときはサングラスを掛けて、車のキーと財布と携帯を持ち、護身用ナイフとオートマチックを見つけて部屋を出る。

オレは一軒の店を訪れる。毎日を平々凡々と過ごしていく人々は決して入ることが無い、入る必要もない店。

「これに合う弾を3ダースくれ。」

オレはカウンターにオートマチックをゴトリと置いた。店主の男は特に気にする風でもなく、店の奥に一旦消えまたすぐに戻ってきた。その手にはオレの指定した銃弾の入った箱が3ダースより一箱多い4ダースがあった。

店主はオレより少し年かさという程度のように見えるが聞き間違えるほどオレも店主も年じゃない。店主に関しては憶測だが。

「ほれ。」

「ああ・・・いくらになる。」

「心がない童じゃな・・・。」

オレは鞆から財布を出そうとした手を止めた。

「童が色違いの坊が言つとつた童じゃな。」

「色違いの坊・・・」

「ああ・・・童たちからはマスターと呼ばれていると言つてたな。」

「マスターの事を知つてるのか。」

店主は老人のような口調で滑らかに話した。これが癖なのか。

「ああ・・・よう知つてる。色違いの坊がまだ童と同じくらいの年だった頃かもう少し年かさになた頃か・・・。長い付き合いになる。色違いの坊はまだ生きているか？」

「ああ・・・」

生きているか？と聞いた老人の顔は笑顔を浮かべていた。人を嫌な気分になせない笑顔だ。オレにとつては。

「年はいくつじゃ。」

「何故そんなことを聞く。」

「質問を質問で返すな。今は儂が童に聞いておるんじゃ。」

「・・・分らない。」

「・・・わからない・・・と？童の年を聞いとるんじゃ。己の年が分からない者などいなかろう。」

店主は老人のような口調で嘲るように笑つた。オレはそんな事全く気にしない。気にならない。

「生憎なことにオレは自分の年も名前も知らない。」

店主は笑うのを止め、オレの顔をじつと眺めた。その目は開いているのか閉じているのか分からない程に細かつた。まじまじと見つめられるのも嘲られることも、もうなんとも思わない。

慣れてしまえば何ともない。それは悲しいような嬉しいような・・・微妙なところだ。

「なら・・・色違いの坊にはなんと呼ばれている。」

的を射ている。マスターに・・・か・・・。昔の名前は知らないが、今の名前はすぐに思い出すことができる。

「何故そんなにオレのことを聞く。俺は客じゃないのか？全部の客に逐一こんな質問をしているのか？」

「そんな訳なからう。全ての客にこんなに質問しとつたら儂の喉が干からびてしまう。」

店主はホッホッホと太った老人のような笑いを起した。

「儂はただ単に童の事が気に入っただけじゃよ。」

「気に入った？こんな物騒な物を買いに來るオレを・・・」

「そうじゃ。童の年頃にしては珍しい目をしておる。」
「目？」

「そうじゃ。まだ若いというに落ちついた心を持っておるように見える。まあ、悪く言えば、何かを諦めてしまった者の目をしておるな。哀しい、闇を見つめている瞳だ。」

闇を見つめている瞳・・・ね。

「ふうん・・・。じゃあ、これ以上あんたと話す気はないんで、コレ4ダース買わせてもらうよ。」

「3ダースじゃなくていいのかい？」

「多くあつて困る物でもない。」

「多くあつて困る物じゃない・・・か。じゃあ、4ダースで一万つとこだね。」

一万？1ダース二千五百じゃないか。

「いくらなんでも安過ぎやしないか？」

「安過ぎやしないさ。この店にあるモンは全部儂のものじゃ。儂が値段を決めて何がいけない。」

そういうものなのか？それで店がやっていけるのか？

「それに、徐々に童のような若造と話しが出来て楽しかった。特別じゃ。」

オレはカウンターに一万札を置き、銃弾の箱4ダースを持って出入口の扉の取っ手に手を掛けた。扉の半分より上の方についている小さな窓の外には眩しい光とうんざりするような喧騒があった。

オレが外に出ようと取っ手を少し引いた瞬間、「そうじゃ、そう

じゃ。忘れるところじゃった。」と後ろから店主に呼び止められた。

「なんだ？」

「最後に一つだけ問うてもいいか？」

オレは何も言わず店主の顔を見ていた。決して老人でもなく、ましてや中年でもないまだ青年と言ってもいい老人口調の店主は一言こう言った。

「名は？」

その開いた瞼の奥の瞳は盲たような淡い灰色だった。

オレは外へと通じる扉を開け、足を進める。

「紅蓉。」

その言葉が店主に聞こえたか聞こえなかったのかは定かではないが、きつと聞こえたのだろう。

街は夕暮れ。部屋の窓から見える公園では子供が手を振り、また明日ねー。とありきたりで適当な軽い約束を交わしている。

もし、昼と夜の間に名前を付けるとしたら殷譎としたい。夕焼けのような美しい時間は夕闇に押されて地球の反対側に消えてしまう。妙な気分だ。太陽はその日その日で姿を変える。時には優しく茜色で包み込んでくれるのに、時には烈火のように激しく拒絶する。しかし、どんな名前を付けたとしても、その存在が揺らぐことは決してない。その紅は空で煌々と、全てを平等に照らそうと輝いている。

春霞・記憶の中の男・『優しい』

全ての出会いを避けられるとしたら、オレはここに居なかった。多分、生きてさえもいなかった。けれど、そうだとしても出会いは悲しみを伴う。出会いがあれば別れがあり、命を持てば死が付き纏う。全ての現象は真逆の現象と紙一重でしかない。『死ねば良かったのに』と『生まれてこなければ良かったのに』が類似しているように……。

夜の商店街の裏通りは俗に娼婦街と呼ばれている。オレはマスターの護衛以外でここに来た事がない。今日もマスターはいつもの店に入る。看板にはネオンで『succubus' mansion』と煌びやかに光っている。

オレは店の入り口で待っている。いつもの事だ。

「……………ここで待っている。」

「了解。」

だいたい二時間。それでマスターは店から出てくる。それまでオレは、店の入り口の前の扉を少しわきにずれたところの壁にもたれてじっと待っている。コートのポケットに手をつ込んで、いつ呼ばれても良いように護身用ナイフを握る。

以前、マスターはオレにも店に入るよう勧めたが遠慮させたもろった。

「いつも俺の護衛ばかりで退屈だろう。おまえもどうだ？」

「いえ……結構です。」

「女に興味がないのか？もしかしておまえ、男が趣味なのか？」

「いえ……どちらにも興味はないです。仕事中ですから。」

「おまえの年頃にしちゃ不健全だな。そんなにいつも気を張ってなくていいんだぞ。」

「ここで、待たせてもらいます。」
オレは頑なに断った。女は嫌いじゃない。本当に興味がないだけなんだ。

そんな会話を交わした後から、マスターがオレを誘う事はなくなった。ただ、「待っている。」という言葉の前に少しの間が生まれた。

娼館の前に立って待っているだけによく女に、殊に娼婦に声をかけられた。一時間過ぎた頃には二人の女に声を駆けられていた。しかし、そのどちらも軽くあしらったら興味が失せたのかすぐにオレから離れていった。三人目がオレに声をかけてきたのはそれから約十分後。

「ねえお兄さん。こんなトコで何してんの？」

その女はオレよりも若く、まだ少女の顔をしていた。

「あたし、この店で住み込みで働いてんだ。入らない？その為に来たんだろ？」

「生憎だがまだ仕事なんだ。他を当たってくれ。それに、オレは娼婦に興味無い。」

オレがそう言うと言はじつとオレの顔を覗きこんできた。まるで始めてみた物を頭で認識しようとしているような。

「あなたって、なんか忠犬八子公みたいね。ご主人様が帰って来るまでじつとただ待っているの。犬っぽいね。」

よくしゃべる女だ。煩いわけじゃないが、よく喋る女はどんなにあしらったところで自分本意なのでいみがない。面倒くさいな。

「お兄さん、誰を待ってるの？こんなとこで待ってるくらいだから女の人じゃないのはわかるけど。」

「オレの雇い主だ。名前は教えてもらっていないから知らないが、オレはその人のことをマスターと呼んでいる。」

「マスター・・・？そう。」

彼女はオレの隣に、オレと同じように壁にもたれた。

「お兄さんの名前は？」

「質問するのが好きなのか？」

「そうじゃないけど、会話がないと落ちつかないのよ。静かなの
って好きじゃないの。お兄さんが無口なのがいけないのよ。」

彼女はオレのことを指差してそう言った。そんな事を言われても
興味がないのに話しなんかしても会話が続かない。だったら、最初
から相手にしないほうが自分にとっても、相手にしてみても楽なん
じゃないのかと考えたからだ。

「紹介がまだだったわね。あたしは春霞。これで良いでしょ？お
兄さんは？」

彼女はニコツと微笑み、オレに聞いてきた。仕方なくオレは、

「紅蓉。」

とだけ答えた。

「コウヨウ？珍しい名前ね。外人さんなの？」

「………さあ。」

「生まれはドコ？」

「知らない。覚えていないんだ。」

その後も十分くらい一方的な質問は続いた。年はいくつ？とかド
コに住んでるの？とか比較的当たり障りのない質問ばかりだった。

煙草は吸うの？という質問にオレは、吸わない、と答え、お酒は飲
むの？という質問にオレは、飲めることは飲めるが強い方じゃない、
と答えた。春霞は「あたしはまだ飲んじゃいけないの。年齢的にね
だから、あたしがここで飲めるのは烏龍茶と時々アルコールの入っ
ていないカクテルだけなの。」と言った。

「………」

急に、質問を繰り返し続けていた口が止まった。

「どうした？」

「な……何が！？」

急に声を掛けられて驚いたのか、裏返った声が帰ってきた。

「急に質問しなくなっただから……ネタ切れか？」

「そうじゃないわ。話しのネタだったらまだたくさんあるわよ。」

つもつと下世話な話とかもね。」

「じゃあ話せば良いじゃないか。」

「……そうなんだけどね。」

また、しばらく沈黙が流れて行く。その歩みはとてもゆっくりで、かなりの時間がかかっていた。

オレは腕時計を見た。マスターが店に入ってから、一時間と三十分が経過していた。

「あと三十分位したら、マスターが店から出てくる。あと一つだけ質問していいよ。オレのプライベートのことでも、仕事の事でもちよつとした頼みなら聞いてやつてもいいけど？」

「本当になんでもいいの？」

春霞は壁にもたれていた体を起し、真っ直ぐにオレを睨むように真摯な目で見た。

「なんでもいいよ。」

オレは春霞の事を見ずにそう答えた。

「あたし、人を捜しているの。」

「それで？」

そして、春霞は話し始めた。

「今から十年前。あたしがまだ小学校に上がったばかりの頃だったわ。あたしの家は自営業で工芸品を扱っている店をやっていたの。でも、父が趣味としてやっていたものだから数も少なかったし、お客も多くはなかったわ。でも、一日一日が平和だった。今思えばとても幸せだったわ。」

春霞は幸せだった過去を懐かしそうに、幸せそうに話した。

「でも、あたしは一人ぼっちになっちゃった。」

春霞はまた壁にもたれ、俯きながら続けた。

「あの日も、いつもと同じ。私と姉は小学校に、弟は幼稚園に、母は仕事にそれぞれ出掛け、父は工房で趣味みたいな仕事に一生懸命没頭していた。いつもの朝をいつものように済ませて家を出たの。そしてそれが、最後の朝。」

春霞は遠く、空を仰いだ。仰いだ空には闇だけが広がっていて、そこに見える物は何もなかった。

そして、ゆっくりと口を開いた。

「殺されたのよ。父さんも母さんもお姉ちゃんも弟も・・・みんな、たつた一人の男に殺されたのよ。」

「春霞だけが生き残ったのか。」

オレは確定事項のように言い放った。

「生き残った、って言えば同情する人もいたわ。でも実際そんな生易しいものじゃないの。」

「生易しい・・・って、じゃあ・・・」

春霞は一度深く深呼吸すると、なお震えた声で言った。

「生かされているのよ。」

「生かされた・・・」

オレはただその言葉を言ってみた。意味も知らない鸚鵡のように、ただ繰り返すだけ。だが、なんとなくは知っていた。多分それは、人によつては死ぬより辛いことだ。

「あたしだつて一度は殺されそうになつたわ。今でもはつきり思ひ出すことが出来る。銃を突き付けられた時の感覚。全身から汗が噴出すような感覚。それはまるで蛇に睨まれた蛙。ぞつとしたわ。本当に殺されると思った。そいつの後ろには父さんや母さんが倒れているの。」

春霞は声を震わせながら話しを続けた。

「そしたら男が言ったのよ。」

「俺が憎いか？」って。

「男はあたしから銃を離してこう続けたのよ。」

「俺が憎いか？家族を殺した俺が憎いだろう・・・？」

そして、男はあたしと同じ目線になるように、あたしの前にしゃがんだ。あたしはそいつの顔を見てやるうと思つたんだけど、泣いていたのとそいつがサングラスを掛けていたのと顔は全然見えなかった。でも、とにかく思いつきり睨みつけてやつたわ。

『良い目をしているな。・・・他の奴あ殺しちゃったが、お前だけは生かしてやる。』

それでも、しっかりと覚えていることがあるの。思い出す度に憎しみしか湧いてこない。それは・・・

『いつか、俺を殺しに来い・・・。それまで、ちゃんと覚えとけ。お前は生かされている身だと。』

って言った後、そいつ、笑ってたのよ。口の端だけで笑うようにニヤツって・・・。

春霞は言い終わったのか、またしばらく沈黙がオレたちの周りを流れていた。それ以外の空間では街の賑やかさが溢れかえっていた。春霞から聞いた話はとても暗く、その時の春霞の気持ちや今こうして生きているのがどんな気分なのかはオレにはとうてい分からないうだろう。だけど、不思議と親近感が沸いた。その気持ちを今のオレが覚えていなくても、昔のオレは体験・経験した事があつたのかも知れない。しかし、結局『今』のオレにとつてはどっかの誰かの記憶にすぎない。オレ自身の話しではない。

暗い、暗い沈黙を破つたのは、やはり春霞だった。

「ご、ごめんね。なんか暗い雰囲気にしちゃって。」

「・・・探しているって言っていた、その男。何か特徴みたいなのないの？」

「え？ああ、いいよ。ただ話し聞いて欲しかっただけだし。」

「オレに出来る範囲でいいなら、捜してみるよ。」

「本当に・・・？」

オレは小さく頷く。

自分でもなんでこんな事をしているのか分からなかった。ただ、なんとなく春霞の力になれば、と。少し、そう思ったんだ。

「たぶん少ししか力になれないと思うけど・・・。」

「紅蓉って、優しいのね。」

初めて聞くような言葉だった。『やさしい』それは、オレがオレになつてから見て聞いて理解した世界には、微塵も存在していなか

った。その四つの音は、確かに世界に存在してはいるが、それが連続した言葉は存在していない。現時点では。

「ありがとう。」

そういうと、春霞は突然オレの首に抱きついてきた。オレは驚いて、急いで春霞の肩を掴んで引き離した。

「どうしたの？」

「……なんでもない。それよりその男の特徴とかないの？じゃないと結構捜しにくい。」

「そうよね。確かに、あの男も私に特徴みたいなのを言っていたわ。それが手がかりだったのね。」

春霞は今頃気がついたかのように、コロコロと笑った。「よく今まで気付かなかったな。」

「あたしってドンカンだから。」

「で？」

オレは急いで話しを戻した。春霞と話していると時間が経つのが早いのか、もう、あと十分ほどでマスターが出てきてしまうかもしれない。

「そうそう。一つ目は名前ね。確か、ソウガって言ってたかしら。もう一つは瞳の色。」

「瞳の色？」

「そう、瞳の色。左右の瞳の色が違うの。正面から見て、右は青いの。西洋の人達みたいに綺麗な、澄んだ空色。だけど、反対の目は赤かったの。充血してるとかそんなんじゃないの。瞳だけが真っ赤なの。まるで血の色みたいな深いふかい紅。」

名前と、瞳の色……か。両方とも随分な特徴だな。

名前なんて簡単に偽れるものだし、同じ名前の奴が居る可能性だってある。それに、瞳の色だってサングラスをしていたらよくは見えない。かなり捜しにくいな……。

「手がかりはそんなもんね。……ここまで言っというてなんだけど、別にいいのよ。捜してくれなくたって。」

「なんで？」

「なんでつて。おかしいでしょ。そんなところで働いているような女が話しなんかしてきたら、勧誘だと思っでしょ？」

「そうなのか？」

「違っわよ。でも世間一般ではそう思う人が多いって事！」

「じゃあオレは、世間一般より少しずれてるって事じゃないのか？春霞が怒る事じゃないだろ？」

「それは、そうだけど。．．．同情とかだったら嫌なの。そういうのってやってる方は自己満足できるかもしれないけど、されてる方は結構イライラするのよ？紅蓉には分からないかも知れないけど。」

「オレがしている事は、同情なのか？．．．違っ。同情とは、ちよつと違っ。」

オレは春霞の頭をそつと撫でる。

「違っよ。時間があったら、捜してみる。」

「お願いね。」

ちよつどその時、マスターが満足そうな顔で店から出てきた。

「ん？お前、その女どうしたんだ？」

「また来てくださいね。」

春霞は店から出てきたマスターに向かってニッコリと微笑んだ。

「なんでもありません。少し、話しをしていただけです。」

オレは春霞から手を離し、マスターの方に向き直した。

「話していただけ．．．ね」

春霞の顔をちらと見た後マスターはニヤニヤと笑って、お前も男なんだな、とだけオレに言った。

オレにはその意味がよく分からなかった。

「嬢ちゃん、また、いつかね。」

「ええ、また。」

マスターが歩き始め、少し離れたのを確認してから春霞に、明日の昼間、またここに来る。とだけ言って、その場を後にした。

全ての出会いを避けてしまっていたら、オレはここに居なかった。多分、生きてさえいなかった。人との出会いと、また今度、という約束がオレをここに留めている。求めれば差し延べてくれる手があるからなのかもしれない。名前があるからなのかもしれない。しかし、差し延べてくれるてがどんなに暖かくても、名前を呼ぶ声があんなに優しくても、血が流れる事は怖くない。それが例え自分でも他人でも、怖いとは思えない。全ての囁き声や叫びが、ただの騒音に聞こえる。

アナタノ声以外ガ・・・全テ騒音ニ聞コエル

待ち合わせ・笑顔・陽の光

『人は大切なモノを失ってから、そのモノの大切さに気付く』なんて、何かで誰かが言っていた。けど、もしその誰かがそうだとしても、オレもそうだとこの事はきつとない。多分、ない。オレにはそんな感情ないから。オレに大切なものなんてないから。探そうとしないから。探したって見つかるとは限らない。オレにオレの時間なんてないけど、そんな不毛な行動、時間の無駄。オレの歩いていく道筋に勝手に落ちていてくれないかな・・・。

「待った？」

「待つのは嫌いじゃないから平気よ。」

オレは約束どおり、次の日の昼に昨日と同じ店の前に行った。

オレがそこに着いた時には春霞がすでに待っていた。

「昼間は仕事がないの？」

「ああ・・・。オレの仕事は夜だけだから、昼は比較的暇なんだ。」

「じゃあ、あたしと一緒にね。」

春霞はとても柔らかく笑った。まるで春に咲く花のような・・・。

なんて、名前だったかな・・・？

「そうだな・・・。」

とにかく、それくらい暖かくて優しい感じがした。夜の顔を見てから昼の顔を見ると、とても同一人物だとは思えなかった。

オレと春霞は暫く裏通りをぶらぶらと当てもなく歩き回った。その間にまた、お互いにあたり障りのない会話を交わした。

春霞は仕事の時間までまだあるせいか服装が軽めだった。けばけばしくも地味でもない。けれど、無頓着でもない。色は薄い桃色と黄色で揃えられていて、配色に関して全く知識のないオレでも綺麗だ

と思えた。昨夜と同じこの場所なのに、この時間帯だけは彼女を年相応の少女に戻してしまうのだろうか？

「オレは、昨日の服より、今の服の方が、綺麗だと思うな。」

春霞はいきおいよく隣に居たオレに顔を向け、満面の笑みで、

「ホントツ！？ありがと。嬉しいっ！」

と言った。しかし瞬間に顔を変えて、

「でも、褒めてるんなら服じゃなくて、フツー着ているあたしを褒めるんじゃないの？」

と頬を膨らませていた。

「ごめん。オレ、そういうのよく分かんなくて・・・」

「謝らないですよ・・・そんなにきつかったかな・・・？」

「いいや。冗談だよ・・・ただ、人を褒めるっていうのあんまりした事がなかっただけ。」

オレは少しだけ口の端を上げて、ニツと笑ってみる。でも、あんまり人を褒めた事がないのは本当。というか一度も。

「・・・」

春霞がオレの顔をじつと覗き込んでくる。

「何？」

オレは春霞に聞いてみる。

「そういう顔していたほうがいいよ。」

「何で？」

「・・・若く見えるから。」

「若く・・・ってそんなに老けて見える？」

ちよつとシヨックだった。オレってそんなに年上ってか老けて見えるのか？

「まあ、それもあるけど、笑っているほうが安心するの。あたしが。」

「

「安、心・・・？」

「うんっ！」

春霞はまた幼く笑った。とても無邪気で、全ての言葉に偽りなどな

いよう……。春霞の全てが、真実だと言つような……。

「で、なん用だったの？」

春霞は考え事をしていたオレの、肘あたりの服を引きそう話し掛け
てきた。

「あ？……。ああ……。連絡先を聞いていなかった。」

「それだけ？」

「他に何かあつたっけ？」

オレは質問に質問を付けて返した。

「なーんだ。あたしに会いに来てくれたんじゃないんだ。がっ
かりい……。」

春霞はあからさまに肩をがっくりとうな垂れさせ、ちらっとオレの
方に目配せした。

「娼婦みたいな言葉だな。」

……。何かおかしい。

「これでも娼婦なんだけどっ。」

「キャバ嬢がいいところだろう？」

……。何かがいつもと違う。何だろう……。

「ひつどいなあ。そーゆー言い方。」

春霞はまた頬を膨らませ、あからさまに怒った表情を見せた。けれ
ど心からは怒つてなどいない。

「でも……。」

春霞はふと、歩みを止め、オレの顔をじつと見つめた。

「でも、以外だな。」

「何が？」

「あたし、紅蓉と一緒にいた時間って殆どないのに、こんなこと言
うのおかしいかもしれないけど……。紅蓉もそう言うこと言うん
だなあ……。って思つて。もつと堅物つてゆーか、あたしがやって
る職業とかに興味ないのかと思つていたから。」

「あ……。」

オレは言葉が見つからなかった。

さつきまで感じていた違和感はこれだったんだ。

自分でも気が付かなかった違和感に、昨日会ったばかりの春霞に見つけられた。

何故か今日は気分が良かった。陽の光もさほど眩しくなくて、足元じゃなく前や春霞の顔を見て歩いていた。なにより、言葉を考えるから発するのではなく、思ったことがそのまま口から出た。感情が言葉や顔に出ってしまった。

オレは、仕事関係じゃないからか、と考えた。それ以外にオレには考えようがなかった。気分が高揚するなんて感じた事もないのだから解かる筈もない。もし、感じたとしてもその時は違和感すら感じないんだろう。

「そうだ！これあげるよ。」

そう言って春霞は俺の手の平に一枚の厚紙を置いた。よく見るとそれは名刺で、表に燐　春霞と書いてあった。

「それ、あたしの本名。裏に住所と電話番号あと携帯の方の番号もあるから。」

「なんて読むの？オレ、漢字あんまり読めないんだ。」

「りんはるかかって読むの。時々、どっちが苗字なのなんて聞かれるんだ。」

りん、はるか。

「じゃあ、時々リンって呼んでもいいんだ。」

「時々ね。でも、そっちの方が好きなんだ。かっこよくて。紅蓉は？」

「オレ？」

オレの・・・本当の名前。なんだろう。オレの本当の名前って・・・。オレには元々名前なんかなくて、オレはマスターが名づけてくれた紅蓉しか知らなくて・・・。

「ごめん。分からない。オレ、オレの本当の名前ってなんだろう・・・。ごめん。本当に分からないんだ。」

「なんで謝るの？」

「なんでだろう・・・でも、オレ、つい最近まで全然記憶が無かったんだ。名前だって最近人に付けてもらったものだし・・・」

「大丈夫、名前の大半は人に付けてもらったものよ？」

春霞は優しくなだめるようにオレに話しかけた。

「あたしのこの春霞って名前も、お母さんに付けてもらったんだ。

春の季節に出る霞はどんな季節に出る霞よりも優しいから、そんな春の霞みたい誰かを優しく包んであげられる人になる様になって付けられたんだって。」

「・・・ごめん。」

「なんで、紅蓉が謝るのよ。」

「家族のこと、思い出させたかと思って・・・。」

「そんなこと・・・。」

春霞は一瞬申し訳なさそうな顔をしたが、一度目をつむりゆっくりと開いた。そして、

「そんなに気を使わなくていいのよ。そりゃ、家族のことは今でも哀しいし悔しいわ。でも、そのことで紅蓉が気に病むことはないのだから気にしないで。」

まるで『母親』のようだ。暖かくて優しくして全てを受け入れてくれるような存在。

「じゃあ、あたしもうお店に戻らなくっちゃっ！準備があるんだ。

お酒出したり、お料理作ったり。色々忙しいんだよね、下働きも。

でも、ご指名してもらえれば接客もやらせてもらえるんだ。だから、早く呼んでね。」

「分かった。考えておくよ。」

「考えておくよ、か。」

「どうした？」

「うつん。なんでも無い！だいじょうぶよ呼ぶときはリンでよんでね。お店では名前、違うんだ。」

「分かった。」

オレはまた少し笑ってみる。

不思議な感覚だった。ほんの少し前までオレの世界は無機的なものばかりで、照らしてくれる太陽は眩しいだけで、届いてくる声はとも少なく弱くて、目に見える色は真っ赤な血の色か闇の漆黒。そんな世界がオレの全てだった。それが世界の全てだと思っていた。けれど、オレの見ていた世界は本当に小さなモノで、全ての中の一部でしかなかった。暗く湿った悪質な世界しか知らなかった。もっと明るく光りに満ちた世界があつたんだ。

「やばっ、あたしそろそろ戻らないと。お店始まっちゃっわ。」

「あ……うん……」

去るうとしていく春霞の後ろ姿を見ると、また変な感覚になった。なんだか、もやもやしている。

「あつ、あの……さ……」

何故だか、一人で行かせたくない。そんな気持ちになった。

「なに？」

振り返った春霞はまだ柔らかく笑っている。

「店……まで、送るよ。」

顔が熱い。熱でもあるみたいだ。

春霞は一瞬、驚いたような表情を見せたが、すぐ後に

「ありがとっつ。うれしい……！」

と、見たこともないような飛びきりの笑顔でオレにそう言った。

オレもなんだかとても嬉しかった。顔がほころぶ。

「紅蓉がそんなこと言うなんて思ってなかったからびっくりしちゃった。」

「オレも……」

春霞に聞こえるか聞こえないか位の声で、そう言った。

「じゃあ、行きましょっつ。」

春霞はオレの腕を取って、オレは春霞に引かれるように、オレたちは歩いていった。

オレたちは店まで帰る途中、また会う約束を交わした。お互い、無理だったらしょうがないけど、なんて言いつつ。

春霞と分かれた後、今日は解からないことだらけだったなあ・・・とか思った。でも一つだけ解かったことがあった。オレは多分春霞のことは嫌いじゃない。好き、という言葉は意味が多すぎて解からないけれど、嫌いという言葉は解かりやすい。オレは春霞の事が多嫌いじゃない。だけど、好きかどうかは解からない。

ただ、あの笑顔は間違いなく好きだ。あの笑顔はとても柔らかくて、どこかが暖かくなる気がした。

オレは一度部屋へ戻り、仕事に出た。感情を殺して。目に光を入れてはいけない。耳を閉ざさなくてはいけない。

今日、一人の男を殺した。銃声が、叫びが、オレの中にやけに響いた。

『人は大切なモノを失ってから、そのモノの大切さに気付く』なんて誰かが言っていた。

大切なモノなんて人それぞれで一概には言えない。けれどそれは、決して無益無害なモノではないはずだ。なにかしら影響があるはずだ。無害なものなら、出来るかぎり避けたい。しかし今生きる人間にそれがわかるはずもない。だから今を、今自分が持っている僅かなモノを大事にしているしかないのだと思った。例えばそれが自分のふところ爆走したとしても・・・。

夢・蒼牙・世界と居場所

あの頃は何も知らなかった。世界の広さはオレの視界の領域だけで自分に出ることと聞いたらただ人の邪魔にならず沈黙しているだけだった。自分以外の人間はたくさんいた。本当にそれは『たくさん』いた。全てが未知数であり、何かは無限であり、何かは芥ほどもなかった。けど、好奇心は生まれぬ。『そんなもんなんだ』と始めから理解していたような、確信のような諦めだけが生まれては頭の中に停滞していった。

オレがその時知っていた世界の殆どは、夜の暗闇や腐蝕し腐爛した肉に集り啄む鴉の黒々とした空気や、血や財欲、色欲、食欲、物欲などの非情な邪欲に塗れた人間達の笑い声のような紅い空気が交じり合った混沌とした世界の裏側。世界の裏側が、オレの世界の全てだった。

今日のマスターはやけに静かだった。というのも、本を読みながら熟睡しているからだ。

そしてオレは、そんな熟睡中のマスターに毛布を掛け、周りに散乱している本を片付ける。

それぞれの入る位置はもう覚えてしまった。麻槻かをりの『東京陥落時』は一番右の棚の上から二番目、左から二番目。浪垣蛹の『誰が為に』は左から三番目の棚の下から三番目、右から五番目。

マスターの寝顔はとても安らかだった。思わず顔がほころぶ。

『大丈夫。心配せえへんでも、お前が受かるように俺が細工をしてある。』

暗い暗い、薄暗い世界に一片の光の欠片だけを投げ込んでくれた人物。

『汚らしい子やなあ。』

『・・・・・・・・け』

『ん？』

『あつちに、行け・・・・・・・・！』

『・・・・・・・・つはははは！おもしろい子やなあ。そないな汚いカツコして、そないなズタボロになった布切れだけ着けて。そんだけモノ言われれば良い方や。』

『煩い、汚らしい大人供がツ。お前たちが醜い争いや抗争を続ける所為で、このような関係の無い子供達が巻き込まれるのだ！』

『何言ってるん・・・・・・・・』

『お前、名はなんと言う？』

俺にマスターに拾われる前の記憶はない。

『あんだ、何もんや。』

『私か・・・・。私はお前の左目と同じだ。闇の色、しかし闇を完全に闇に染まる事は出来なかった。悲しき事よな。』

『言ってる事がよー分からんのやけど』

『知らないのなら私が教えてやろう。お前の哀しき定め、そして運命。光には受け入れられず、闇には染まりきれない哀しき定め。そしてその右目は・・・・・・・・』

バタツ！

『おいッ！あんだ大丈夫か！』

『少々、陽に当たり過ぎたか・・・・。まあいい。』

『俺の何を知っている。』

『ふつ。知りたいか？・・・知りたくば、この子供を匿ってみるがいい。さすれば私がまた顔を出すかもしれんな。』

『・・・分かった。必ず。出て来い。』

『フツ。私は汚らわしい人間どもと違い、約束は必ず守る。では、また会おう。色違いの瞳を持つ者よ。』

『違う。』

『名は？』

『蒼牙』

『そうか。では蒼牙。また会おう。私の名はコウヨウ。』

『おお・・・やっと目え覚ましよったか。』

『・・・？』

『なんや、なんも覚えてへんのか？・・・まあええ。俺について来い！お前を雇ったる！』

オレは何が何だか分からないうちに、マスターの所に居た。

綺麗な服も味の良い食事も寝返りを打つても居たくないベッドも初めから在った。オレのすぐ近くに在った。

しかし、疑問もあつた。

オレは、誰なんだろう。オヤは居ないんだろうか。

でも、結局、そんな事どうでもいいんだ。

『どうしたんや？紅蓉。』

『なあに、言ってるんや。ここが紅蓉の家やないか。安心して休み。』

マスターがオレの名前を呼ぶ。必要とされている。それだけが、ただ、嬉しかった。

ただどいつか他にも、安らげる場所、名前を呼ばれたいヒトができ

るのだろうか……。

「……ん？」

「マスター。おはようございます。」

「なんや。紅蓉か。おつ、ありがとな。」

「な、何がですか？」

「本、片してくれて、ありがとな。」

マスターはにつこりとほほ笑み、オレに礼を言ってくれた。

「いえ。これくらい、容易い事です。オレはマスターの元でしか生きられませんから。」

「そないなことないわ。オレやかて……」

マスターの言葉が、ふと途切れる。

「マスター？」

「いや、なんでもないよ。」

今はこの場所がオレの全て。マスターだけがオレの居場所。

あの頃は何も知らなかった。世界の広さはオレの視界の領域だけで自分出来ることといったらただ人の邪魔にならず沈黙しているだけだった。自分以外の人間はたくさんいた。本当にそれは『たくさん』いた。全てが未知数であり、何かは無限であり、他は芥ほどでもなかった。

オレがその時知っていた世界の殆どは、夜の暗闇や腐蝕し腐爛した肉に集り啄む鴉の黒々とした空気や、血や財欲、色欲、食欲、物欲などの非情な邪欲に塗れた人間達の笑い声のような紅い空気が交じり合った混沌とした世界の裏側。世界の裏側が、オレの世界の全てだった。

しかし今は、安らぎや温もりといった一片の光が、オレの心を射していた。痛くて、でもそれが安らぎをくれる。切なくて、でもそれが温かい。

とてもとても、矛盾した心だ。

夢・蒼牙・世界と居場所（後書き）

マスターの口調が関西弁になっていますが、間違いではありません。
第二話では共通語を話していましたが、本来は関西弁です。

桜祭・ドリンク・丹わぬ舞(前書き)

季節は流れに流れ夏です。

桜祭・ドリンク・叶わぬ夢

果て無き日々は誰の為？
生きているのは何の為？

誰ぞ彼時に思いを馳せるは貴方。

朝日出る時に想いを抱くは貴女。

しかし、真昼の月は蒼白く、ただ空に浮かぶ海月の如く。
あなたのおもいは届かない。オレの願いは届きはしない。
叶わぬ夢は夢の俤。

『デートに行きましょう！』

そう言ってきたのは春霞だった。

正午をとくに過ぎた、午後三時の部屋の中。燦燦と夏の太陽が照りつける西向きの窓からは、カーテンが引いてあってもその熱気が伝わってくるほどだった。冷房がかかっているもそこだけは温度が殆ど変わらない。

「デー・・・ト？」

俺は冷たい飲み物の入った二つのコップを持って立ったまま、暫く悩んでいた。

その間にこめかみの辺りから汗が頬を伝い落ちていった。

「え……つと。デートって、何？」

オレがそう聞くと春霞はひどく驚いた顔を向けてきた。

「おっどろいた……。紅蓉の物知らずってそーとーなのね」

「そんなに言う事ないだろ。そんなにおかしいことかな？」

オレは春霞の驚いた顔に驚いたし、困惑した。

最近、春霞と過ごす時間が多くなってきた。オレが危ないからだめだと言っても、「紅蓉が守ってくれるんでしょ？」といったもの暖かい笑顔を向けてくるから、邪険にできない。それに春霞と過ごす時

間はオレにとつて、何かと学ぶことが多い。

「かなりね。前に”桜祭り”にことを知らなかった時はビックリしたけどね」

オレの心臓がドクンと嫌な音を立てて跳ねた。

まだ季節的に暖かった頃、春霞と商店街を歩いていたときだった。

『紅蓉、見て。外灯に桜が。そういえばもうすぐ桜祭りね。』

『サクラマツリ?』

『またあ?』

その頃からこの『またあ』は春霞の口癖になっていた。でも不思議と嫌な気がしないのは、春霞の言葉に敵意がないからかもしれない。桜祭りってゆーのは、この春の季節に咲く綺麗な花を皆で愛でましよう、ってお祭りよ。』

『桜の花つてそんなに綺麗なの?』

春霞は少し時間を置いて、オレの顔を覗きこみながら、

『もちろん!』

と答えた。そしてまた柔らかく微笑んだ。

『あたし桜の花が一番好きなの』

春霞は囁くように言った。

『普通の花じゃないの?』

『ちよつと、前にも言ったでしょ。普通って言葉あまり使わないで』
つ

子供のように少しだけ頬を膨らませて、春霞は拗ねた顔をした。

『い、ごめん。じゃあどういう花なのさ』

『まあ、花は花なんだけど…でもあの薄い桃色の花びらがはらはらと散るのは一見の価値ありって感じよ?だから、行きましようよ、桜祭り!』

『そつか…春霞がそこまで言うなら行きたいけど、仕事があるから無理かも…』

『それでもいいよっ!一緒に行つてくれる気はあるんだよね!』

春霞はオレのことを真っ直ぐ見て訴えてくるから、唯の言い訳だと言えなかった。

『マスターに取り合ってみるよ』

そう言ったけど、実際はそんなコトしなかった。マスターに暇がほしいなんて怖くて聞けなかった。

後日、いきなりどうだった？と春霞に聞かれて、少し躊躇ったが、

『ごめん。やっぱりだめだったよ』

と答えた。最初の小さな嘘だった。

その後の春霞の表情は落胆の色なんてしてなかった。

『そっか…でもしょうがないよね。護衛の人が遊びになんか行つて危ない事とかになつたらいけないしね』

『ごめん』

『謝らないで。紅蓉はマスターさんにちゃんと聞いてきてくれたんだもん。それだけで充分よ。ありがとう』

春霞はオレの目を真っ直ぐに見て、言った。その瞳がとても綺麗で深い罪悪感にかられて、泣きそうになった。すぐに言ってしまうはよかったのに、結局言えなかった。本当は違うんだ、って。本当は聞いてすらいらないんだ、って。本当は怖くて聞けなかったんだ。本当に謝らなきゃいけないのはそっちの方なんだ。だから、ごめんの言葉の裏で”オレは怖くてマスターに聞く事もしなかったんだ。ごめん。”って謝ってた。

もう嘘はつかない。嘘は今日までにしようってその日に決めたから。『来年は、一緒に見ましようね？』

「紅蓉？」

「…ん？あつ！ああ…、何？」

「うっん。何でもないけど、ボーツとしてると危ないわよ？コップ」

一瞬、春霞が何を言っているのか分からなかったけど、しばらくして急いで手に持っているコップを見るとかなり傾けて持っていたのか、あと少しの所でドリンクが零れそうになっていた。

「あつ！と、ごめん。でなんだっけ？」

「デートの話しよ」

「ああ、そっか。で、デートってなんだっけ？」

「デートってゆーのは…そーだなー、説明求められると以外とわからないモノねー…デートってゆーのは、男の人と女の人が一緒に出掛けること…かな？」

春霞はしどろもどろしながらもやっと出てきた説明をしてくれた。

「出掛けるだけでいいの？」

「うん。でも…」

「何？」

春霞は顔を赤くし俯いて何かを躊躇っていた。

「あの…好き同士、ってゆーのも最低条件、かな」

オレは春霞の真横に座り、ローテーブルにコップを置いた。覗きこむと春霞は顔を真っ赤にさせていた。

「別に良いんじゃない？オレ、春霞のこと嫌いじゃないし」

「本当に?!」

春霞は急に顔を上げるとオレの顔まであと十数センチというところで、嬉しそうにそう言った。

「う、うん。好きかどうかってのはオレよく分かんないけど、春霞は嫌いじゃないよ。それは分かる」

オレは春霞の肩を押さえてちゃんと座らせた。それでも春霞の顔は全く変わらずとても嬉しそうだった。

「じゃあ、今日の日曜日につ！」

「今日の日曜日?!」

オレは結構遠くにあったカレンダーに目を凝らす。今日は木曜日。

「明後日?! そんな早く都合つくかなあ…春霞の方は大丈夫なの？そんなに早くて」

「あたしの方は全然大丈夫！毎週土曜日は休み入れしてもらってるから。紅蓉は休みとかもらってないの？」

コップの中の氷がカランと音をたてた。外からは自己主張の激しい

蝉の音がする。

そういえば最初から休みの事なんか考えてなかったから忘れてたけど、春霞は休みをもらってるんだ。

「もらったことない…かな？考えてもいなかった」

「ちゃんと言わなきゃだめよ。どんなに偉い人でも頭の良い人でも人の上に立つ人なら、下で働く人の事を考えるべきだよ」

春霞は壁に寄りかかり真っ直ぐに前を見て、憤慨していた。

そんな春霞を横目で見て面白いと思った。春霞は一体、そこを見ているのだろう。

「でも、言いづらい人なら、無理しないでね？」

「うん。それは分かっているよ」

春霞のことでは無理はしない。それは分かっているつもりだ。春霞のことでは。

「絶対よ」

「うん」

それきり、しばらく会話はなかった。妙な沈黙が流れた。

時計の音がカチカチと単調に空気を震わしていた。外からはなおも蝉の喧しい声がこだましているように響いてくる。クーラーの起動音も心なしか自己主張が激しいことが分かった。

「……」

「暗くなってきたね」

「そろそろ行かなくちゃ？」

「なんで疑問系なの？」

オレたちは少し笑いあった後にようやく腰を上げた。

「飲み物全然飲まなかった。ごめんね」

「大丈夫だよ。少しだけでも飲む？外は暑いから」

「うん。貰おうかな？どうせ汗掻くだろうし」

オレは春霞にコップの片方を渡した。もう片方は自分の右手に持って、そのままキッチンに持って行く。

「飲まないの？」

「うん。あんまり喉乾かないほうなんだ」

「大丈夫なの？」

「大丈夫だよ。汗もあんまり掻かないほうだし」

「でも、少しは飲んだほうが、いいと思う」

春霞は半分ほどまで飲んだコップをオレに渡してきた。

電気をつけていない部屋は薄暗くなってきた。彼女の顔はあまりよく見えなかった。

「先に玄関に行つて、クーラーとか消したりしなきゃいけないから」

「…わかったわ」

彼女はそう言うときッチンから出て玄関に向かった。

オレはすぐに済むからと言って彼女が玄関にいるのを確認してから、残っていたドリンクを両方とも排水溝に向けて流した。氷が派手な音を立ててシンクに落ちた。

「どうしたの？」

遠くから聞こえる彼女の声は小さく掠れていた。

「ただの氷だよ。流しに捨てただけ！」

オレは急いでクーラーの電源を落とし、玄関に向かおうとした。

「？」

ふとテーブルの下を見ると彼女の帽子が置いてあった。手に取る。

（忘れていたのか？）

忘れていたよ、と教えようかと思ったけど止めた。それが次に彼女に会うために必要なもののような気がして、この時は返す気にならなかった。

（今は黙ってしよう）

帽子をテーブルの上に戻し、玄関に向かう。

「お待たせ。行こうか」

「ええ」

玄関の扉を開けると暑い外気がまず出迎える。次に蝉の騒音。

しかし、オレは歩き出す。夜の街へと駆り出さなくてはいけない。

望むとも望まずとも進まなくてはいけない道を歩いていくような気さえる。しかし抗うことさえ許されない道だと分かっているから何も出来ない。何も出来ないと初めから分かっているから何もしない。

望みを持つてはいけない。持てば叶わなかった時に残る感情に潰されてしまう。

願いを持つてはいけない。分かっていたはずなのに、今オレは望みを抱いている。

『でもあの薄い桃色の花びらがはらはらと散るのは一見の価値ありつて感じよ?』

彼女がそう言ったものを想像してみる。大木薄桃色の花びらが張りつき、それが留まることなくはらはらと散っている様を。

毎年一緒に桜祭に行こうと、一緒に桜の花を見ようと約束をしてしまった。

前まで、約束がオレを生かしていると思っていた。約束があれば明日に繋がっていられると思っていた。しかし、最近は違うように思えてきた。

オレは生かされている。けど、生きていて良いのだろうか？

「ひっ……！ たっ、助けてくれー！」

「観念しろやあっ！ 紅蓉！！ そっちに行っただ、止める！」

「イエス。マスター」

繁華街の裏通り。そこでオレはマスターの追いこんできた男に、ピタッと照準を合わせた。標的されている男の真後ろにはマスターが立っている。

「最期に、言い残したことはないか？」

マスターが話すと、男は後ろを向いた。しかしオレは標的から目を離さない。

男は口を閉ざしたまま、肩で息をしていた。手には何も持っていない。丸腰だ。男はマスターから目を外しオレを睨みつける。

「無いんなら、ここで終いや。紅蓉」

「はい」

「殺せ」

「イエス。マス……」

オレが言い終わらないうちだった。その瞬間、標的は何かか切れたように咆哮し、懐から折りたたみ式のナイフを取り出した。そして男はそれを振り翳しオレに向かってきた。

オレは出来る限る冷静に照準を合わせ直し、引き金を引いた。銃弾は走っている標的の左腹部に命中。貫通しないように骨を狙ったのでかなりの激痛が伴っているはず。

「ぐっ……！」

標的の男は苦痛の表情を浮かべた。それを見てオレは終わりだろうと思い銃を降ろした。「紅蓉っ！構えろっ！！」

マスターの声に反応し前を見ると、オレの数メートルにまで男が迫ってきていた。その右手にはナイフがあつて、今まさにオレに振り下ろそうとしていた。

（ヤバイ）

そう思った時にはもう遅かった。構えなおした銃から発射された弾丸は、男の耳を飛ばしたただけだった。

「アーメン」

それだけ言うと男は力尽き、その場に突っ伏して倒れた。男の腹からは血が滲み、溢れていた。その場に残った男の遺品は、無様な死体と神への祈りの言葉。そしてオレの腹に深く刺さっているナイフだった。

オレは男の血溜まりに銃を落とし、膝から崩れた。地面に手を付くと血が跳ね、服や顔についた。

「紅蓉っ！！」

自分の腹を見るとナイフが刺さっている所からじわじわと赤い染みが広がっていくのがみえた。

ナイフの柄に手を掛け、一気に引き抜く。

「……………！！ぐっ…くっ……………そお！！」

ナイフは乾いた地面に落ち乾いた音を立てた。抜いた所からさらに出血が酷くなり、血が溢れてきた。

「紅蓉っ、生きとるかっ!？」

オレに駆け寄るマスターがひどく心配そうな顔をしていた。

「すみま…せ……………オレ…」

息が苦しい。頭がクラクラする。

オレは腕で体を支えられなくなり血溜まりに倒れそうになった。しかしすんでのところでマスターに支えられ助かった。

「おい、紅蓉？おいつ、しっかりせえ!…っそ…まだ死ぬなよっ」

マスターはオレを抱え上げ、どこかに向かい走りだした。行き先は分からない。意識が保てない。

オレはこれから何処に行くんだ？

果て無き日々は何時の為？

生きているのは何の為？

誰ぞ彼時に強く祈るは貴方。

朝日出る時に儂き夢を望むのは貴女。

しかし夜の帳が降ろされれば黄金に輝く月は美しく、それは神の如くに美しい。

願いの数は人の数。破れた空からしとと流れ落ちる数多の夢たち。

叶わぬ願いは血のようだ。

桜祭・ドリンク・叶わぬ夢(後書き)

第六部、最後まで読んでくださってありがとうございます。ご足
労とは思いますが、評価をしていただければ、幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2010a/>

声ガ聞コエル 壱

2010年11月29日07時12分発行